



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

Research on the Use of Verbs in Children with Hearing Impairments: In Relation to Semantic Specificity of Verbs.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤, 隆史, 新海, 晃 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173456

聴覚障害児における動詞の使用に関する一研究

—— 意味の限定性との関係から ——

澤 隆 史*・新 海 晃**

(2019年11月25日受理)

SAWA, T. and SHINKAI, A.; Research on the Use of Verbs in Children with Hearing Impairments: *In Relation to Semantic Specificity of Verbs*. ISSN 1349-9580

The purpose of this study was to investigate the feature of verb usage in children with hearing impairments from the viewpoint of the semantic specificity of verbs. Participants were 30 children registered in the elementary school department of the school for the deaf and 27 children registered in the elementary school. The participants were assigned two tasks: the multiple-choice task and the sentence production task. In the multiple-choice task, two kinds of action verbs and mental verbs were set as target verbs. In the sentence production task, the general all-purpose verbs and specific verbs were presented, and sentences were produced freely. The results showed that both deaf and hearing children had difficulty using mental verbs properly and that children with hearing impairments performed worse than hearing children. The results of the sentence production task showed that deaf children had difficulty in producing sentences using the specific verb. These results suggest that children with hearing impairments have difficulty in understanding the meaning of verbs from language activities in daily life.

KEY WORDS : Children with Hearing Impairments, Verb, Semantic Specificity

* Department of Education for Children with Special Needs, Tokyo Gakugei University

** Graduate School of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University

1. はじめに

聴覚障害児・者の語彙の理解や産出については、これまでに語彙数の少ないことや獲得している語彙に偏りのあることが報告されている。McEvoy, Marschark, and Nelson (1999) および Marschark, Convertino, McEvoy, and Masteller (2004) は、聴覚障害大学生の語彙力について語連想課題を用いて検討した結果、聴者の学生と比較して語彙同士の結びつきが弱く特異なネットワークを有していることを指摘している。また Sarchet, Marschark, Borgna, Convertino, Sapere, and Dirmye (2014) は PPVT 等

を用いて聴覚障害大学生の語彙力について調査した結果、聴者の学生と比較して語彙が乏しいこと、自分の有している語彙力に対して過大評価していることを報告し、聴覚障害児に対しては、偶発的な語彙学習や世界知識の習得が重要であること、幼児期から学齢期さらには高等教育段階に至るまで、語彙の指導を継続する必要があることを指摘している。

日本語の語彙の理解や産出についても同様の点が指摘されており、聴覚障害児の語彙に関する量的・質的特徴が検討されている。特に文の要となる(影山, 2001)重要な要素である動詞については、意味の限定性という

* 東京学芸大学特別支援科学講座

** 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所

観点から聴覚障害児の動詞使用の特徴が検討されている。例えば、左藤・四日市(2004)は、難聴小学生を対象に名詞+助詞の後に続く動詞の産出傾向について分析した。その結果、文脈の制約が厳しく特定の事象に対して限定的に使用される限定動詞よりも、文脈の制限が緩く様々な事象に対して使用される包括動詞の方が産出されやすいことを報告している。そして、このような傾向が生じる原因として、獲得している語に偏りのあること、文脈を特定化する語の獲得が困難なこと、特定の名詞と動詞との共起関係が固定化しやすいことを挙げている。同様の観点から、林田・菱田(2011)は聾学校小学部児童における動詞の使用について検討し、限定動詞の使用が困難なことを示すとともに、手話表現への依存、名詞と動詞の共起関係の独自の解釈、助詞を無視した動詞の使用といった特徴を指摘している。さらに林田(2013)は聾学校中学部の生徒を対象に、提示した名詞に対してその名詞と共起する動詞を選択させる共起性判断課題を実施した。その結果、聴覚障害児が産出した動詞の数は聴者と比較して少ないこと、動詞の自他や活用形によって産出傾向が異なることなどを報告し、聴覚障害児の名詞と動詞の共起関係は柔軟性に乏しく固定化しやすい傾向のあることを指摘している。

これらの研究は、聴覚障害児が文の表す意味や文脈に応じて動詞を使い分けることに困難を有することを示唆している。一方、感情や気持ちを表す心的動詞の産出について検討した左藤・相澤・四日市(2011)は、限定動詞の産出数が健聴児と同等であることを報告しており、左藤・四日市(2004)、林田・菱田(2011)と異なる結果を示している。このような結果の相違について、対象とした動詞の種類に拠るのか、使用した課題の影響に拠るのかという点を明らかにする必要があると考える。また先行研究では文脈に応じた動詞の使用について検討しているが、特定の動詞からどのような文脈を想起できるか、という点については明らかにされていない。

本研究では、聴覚障害児の動詞の使用について意味の限定性という観点からその特徴を検討することを目的とする。具体的には、動作や行動を表す動作動詞と心的状態を表す心的動詞について文脈に応じた使用が可能か否かを多肢選択課題によって検討するとともに、提示した動詞を用いた文産出課題を実施し、どのような文脈を想起できるか、という点について検討する。

2. 方法

2. 1 対象児

聾学校小学部に在籍する聴覚障害児30名(小学部

4年生11名、5年生10名、6年生9名)とした。対象児の良聴耳の平均聴力レベルの平均は93.8dB(範囲:31~133dB)であった。また、対照群として通常の小学校に在籍する4年生の児童計27名を対象とした。

2. 2 課題

動詞の獲得を検討するため動詞選択課題と文産出課題を設定した。動詞選択課題(以下、選択課題)は、ある状況を表す文を提示し、その文の意味を最も適切に表す動詞を4つの選択肢から選択させる課題である。文産出課題(以下、産出課題)は、提示した動詞を用いて自由に文を産出させる課題である。また聾学校児童については、補足的な資料として在籍する学校で実施した教研式全国標準リーディングテスト(以下、RT)の成績を収集した。

2. 3 課題に使用した動詞の選択

選択課題及び産出課題で使用する動詞の選定ならびに問題文の作成にあたって、はじめに「類語辞典(柴田・山田・加藤・初山, 2008)」および「日本語多義語学習事典 動詞編(森山, 2012)」を参考に、児童が日常生活において触れる機会が多いと考えられる動詞を抽出した。なお、動詞の抽出に際しては、物理的な動作や人の行動などを表現する動詞(以下、動作動詞)と感情や感覚などを表現する動詞(以下、心的動詞)の二種類を設定した。さらにそれらの動詞の中から、以下のa~cの条件に該当する動詞を選定した。

- 「新教育基本語彙(阪本, 1984)」におけるA段階(小学校低学年相当)およびB段階(小学校中~高学年相当)に該当すること。
- 左藤・四日市(2004)を参考に、ターゲット(正答)となる限定動詞、ターゲット動詞と意味が類似した動詞(以下、類義語)、ターゲット動詞の意味を含む包括動詞の3種類の動詞を組み合わせて選定できること。
- ターゲットとなる限定動詞の使用が必然的であり、かつ可能な限り少ない語数で児童にとってなじみのある日常生活や学校生活などの場面を表す課題文を作成できること。

2. 4 課題の作成

はじめに2. 3で選択した動詞を用いて、選択課題を作成した。選択課題は課題文の動詞部分を空欄とし、文全体の意味に合致する動詞を4つの選択肢から選択させる多肢選択式とした。課題文は限定動詞が正答となるように作成し、正答以外の3つの選択肢はいずれも正答と意味が類似した類義語2つと、正答の包括動詞とした。

Table 1 課題に使用した動詞

課題	種類	課題に使用した動詞
動詞選択課題	動作動詞	つかむ, はぐ, すすぐ, よそう, つめる はがす, はずす, ひびく, はおる, きざむ
	心理動詞	はしゃぐ, うんざりする, ひがむ, そこねる, くつろぐ, しずむ, たたえる, なげく, 気づかう, おびえる
文産出課題	包括動詞	さがす, あつまる
	限定動詞	あさる, むらがる

ターゲットを動作動詞とした問題を28問、心的動詞とした問題を14問作成し、大学生30名を対象として予備調査を実施した。課題はワークシート形式で実施し、4つの選択肢の中から一番正しいと思うものを一つ選んで番号に“○”をつけさせた。解答時間は5分程度であった。予備調査の結果、正答率が90%を超えておりかつ誤答が包括動詞に偏っていない問題を選び、さらに「新教育基本語彙」に照らして動作動詞と心的動詞それぞれの問題の選択肢となる動詞の難易度が可能な限り同等となるように配慮して、最終的に動作動詞問題10問、心的動詞問題10問の計20問を作成した。

産出課題については、選択課題で使用しなかった動詞のうち、限定動詞と包括動詞の組み合わせを2組、計4語の動詞を呈示し、その動詞を使用して文を自由に産出させた。課題に使用した動詞をTable1に、問題の例をFig.1にそれぞれに示した。

【動詞選択課題】	ガラスにはっていたシールをていねいに
	<ul style="list-style-type: none"> 1. はがした (正答) 2. とった (正答の包括動詞) 3. はずした (正答と意味が類似した動詞) 4. むしった (正答と意味が類似した動詞)
【文産出課題】	「行く」 → 「日曜日にお母さんと動物園に行った」。 (動詞を呈示し、文を自由産出)

Fig. 1 課題の例

2. 5 手続き

課題はワークシート形式とし、聾学校児童については学年ごとに一斉テスト形式で行った。ワークシートは、教示文ならびに例題1問が印刷されたフェイスシートと、本課題から構成した。表記はA4版縦の用紙に横書きとし、フォントは教科書体を使用した。実施に際しては、はじめに教示文と例題を提示し、課題の解答方法について口頭と手話による説明を行った。選択課題を全員が終了後、引き続き産出課題に移行した。なお産出課題についてはできるだけ長い文を書くよう教示した。所要時間は選択課題と産出課題をあわせて15～20分であった。

なお、通常の小学校についてはそれぞれの課題の実施手順・教示方法を紙面にて説明し、担任教員に依頼して一斉テスト形式で実施した。所要時間は約15分であった。

3. 倫理的配慮

研究の実施にあたっては、学校長の許諾を得た上で紙面によって保護者に対し研究内容の説明を行い、書面による同意を得て行った。

3. 結果

3. 1 選択課題の成績について

選択課題については問題1問の正答に対して1点を与え、各対象児群の動作動詞と心的動詞の平均得点と標準偏差を求めて、Fig.2に示した。Fig.2に示したように、いずれの対象児群においても心的動詞より動作動詞の得点が高かった。聴覚障害児群（以下、D児）の得点について、学年(3)×動詞(2)の二要因分散分析を行った結果、動詞の主効果のみ有意であり($F(1,27)=12.379, p=0.001, \eta_p^2=0.314$)、学年および交互作用は有意でなかった($F(2,59)=0.957, p=0.396, \eta_p^2=0.066$; $F(2,27)=0.724, p=0.493, \eta_p^2=0.050$)。学年間の成績の差が有意でなかったため、以下ではD児を一群とみなして分析を行った。

D児と聴覚群（以下、H児）との成績の差を比較するために、対象児群(2)×動詞(2)の二要因分散分析を行った結果、動詞の主効果が有意であり($F(1,55)=54.790, p=0.000, \eta_p^2=0.499$)、対象児群の主効果は有意でなかった($F(1,55)=0.891, p=0.349, \eta_p^2=0.015$)。交互作用が有意であったため($F(1,55)=6.345, p=0.014, \eta_p^2=0.103$)、単純主効果を分析した結果、D児およびH児における動詞の効果がいずれも有意であり($F(1,29)=12.062, p<0.01$; $F(1,26)=49.121, p<0.01$)、動作動詞における対象児群の効果が有意傾向であった($F(1,55)=3.865, p<0.10$)。以上の結果より、D児とH児のいずれにおいても心的動詞の成績が低いこと、動作動詞についてはD児の成績がH児より低い傾向のあることが示された。

Table 2 文産出課題における評定値が低い文の例と数

反応の種類	特徴	産出文例 (「あさる」)	反応数	
			D児	H児
動詞の意味の誤り	形態 (音韻) 的に類似した単語への誤り, ターゲット語以外の動詞の使用	「プールに入るときあさいでした。」	8	0
状況説明の不足	状況に関する記述の不足	「人をあさる。」	6	5
文意不明	ターゲット語の未使用	「ある海に〇〇と言う人達がくらしていました。」	1	0
合計			15	5

次に誤答した際の類義語と包括動詞の選択率を求め、各対象児群について動詞ごとの結果をFig.3に示した。H児ではいずれのタイプの動詞でも包括動詞が選択される割合が高いのに対し、D児では動作動詞において包括動詞の選択率が高く、心的動詞ではほぼ同等の選択率を示した。 χ^2 分析を行った結果、各選択肢の選択数に有意差が示され ($\chi^2 = 56.405, df=6, p=0.000, \omega=0.222$)、残差分析の結果、H児では動作動詞の包括動詞 (調整された残差=-2.350, $p<0.05$) と類義語 (調整された残差=-4.267, $p<0.01$) の選択数が有意に少なく、心的動詞の包括動詞 (調整された残差=3.844, $p<0.01$) の選択数が有意に多かった。一方、D児では心的動詞における類義語 (調整された残差=4.698, $p<0.01$) の選択数が有意に多かった。以上の結果より、特に心的動詞においては、H児と比較してD児の方が包括動詞を多く選択することが示された。

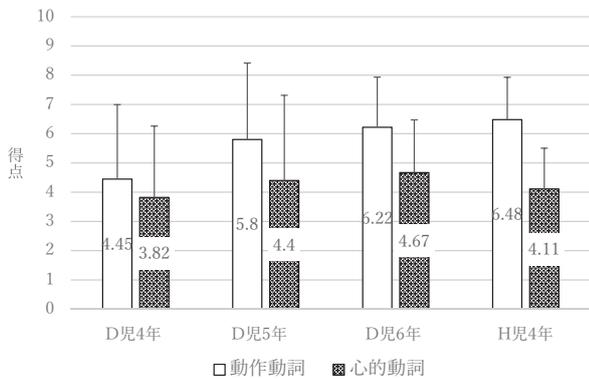


Fig. 2 動詞選択課題の成績 (縦線は1 S.D.)

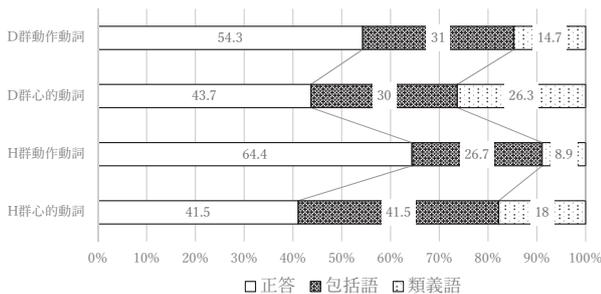


Fig. 3 動詞選択課題における各選択肢の選択率 (%)

3. 2 産出課題の成績について

産出課題の成績を分析するにあたって、大学生および大学院生計20名を対象に、対象児が産出した文について、その表現の意味のわかりやすさを4段階 (4:「とてもよくわかる」～1:「わからない」) で評定させた。評定にあたっては文の統語的誤りではなく意味のわかりやすさに注目するように教示した。ただし、日本語の文として理解不能な表現については「意味不明」として判断させた。

各対象児群において動詞ごとに平均評定値を算出し、Fig.4に示した。なお、未回答および意味不明の表現については、0点と見なして平均値を算出した。Fig.4に示したように、いずれの対象児群においても限定動詞より包括動詞の得点が高かった。D児の得点について、学年 (3) × 動詞 (2) の二要因分散分析を行った結果、動詞の主効果のみ有意であり ($F (1,27) = 194.225, p=0.000, \eta_p^2=0.878$)、学年および交互作用は有意でなかった ($F (2,27) = 1.593, p=0.221, \eta_p^2=0.105$; $F (2,27) = 1.941, p=0.163, \eta_p^2=0.125$)。学年間の成績の差が有意でなかったため、以下ではD児を一群とみなして分析を行った。

D児とH児との成績の差を比較するために、対象児群 (2) × 動詞 (2) の二要因分散分析を行った結果、対象児群と動詞の主効果がいずれも有意であり ($F (1,55) = 132.883, p=0.000, \eta_p^2=0.707$; $F (1,55) = 171.487, p=0.000, \eta_p^2=0.757$)、交互作用も有意であった ($F (1,55) = 80.310, p=0.000, \eta_p^2=0.593$)、単純主効果を分析した結果、いずれの対象児群でも動詞の効果が有意であり ($F (1,29) = 181.986, p<0.01$; $F (1,26) = 14.984, p<0.01$)、さらに限定動詞と包括動詞での対象児群の効果がいずれも有意であった ($F (1,55) = 11.449, p<0.01$; $F (1,55) = 164.046, p<0.01$)。以上の結果より、D児とH児のいずれにおいても限定動詞の成績が低いこと、またいずれの動詞についてもD児の成績がH児より低いことが示された。

次に意味が分かりにくかった産出文の特徴について分析するために、評定値が2点以下の文を抽出したところD児で16文、H児で5文の計21文が該当し、そのうち18文 (88%) は限定動詞を用いた文であった。各文の特徴

を分析するためのカテゴリーを設定し、各カテゴリーに分類された文の数をあわせてTable2に示した。Table2に示したように、D児においては「動詞の意味の誤り」が最も多く全体の半数以上を占めた。H児ではすべての文が「状況説明の不足」に分類され、「文意不明」の文はD児において1例のみ認められた。

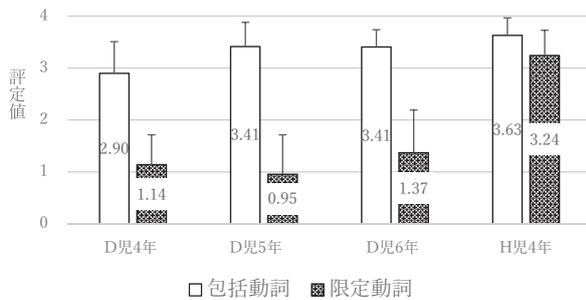


Fig. 4 文産出課題の平均評定値（縦線は1S.D.）

3. 3 各課題と読書力との関連について

選択課題と産出課題のそれぞれの得点とRTの各下位検査の評価点との間で相関係数（ r ）を求めて、Table3に示した。Table3に示したように、いずれの課題とも読書力との相関は有意であり、特に選択課題では強い相関が示された。

Table 3 各課題とリーディングテストの相関（ r ）

下位テスト	動詞選択課題	文産出課題
読字力	0.741	0.355
語彙力	0.864	0.361
文法力	0.860	0.322
読解力	0.826	0.363

いずれも $p < .01$

4. 考 察

4. 1 動作動詞と心的動詞の使用

本研究の結果、D児とH児のいずれにおいても、動作動詞と比較して心的動詞の成績が低いことが示された。また動作動詞についてはH児と比較してD児の成績が有意に低く、使用が困難であることが示唆された。左藤ら（2011）は、文脈に応じた心的動詞の産出数について検討した結果、聴覚障害児の成績が聴児と同等であることを報告している。本研究の結果は、心的動詞の使用についてD児とH児に顕著な差がないという点では、左藤ら（2011）と同様であった。また動作動詞においてH児の成績が高いという点でも、左藤・四日市（2004）や林田・菱田（2011）を裏付ける結果となった。しかし、動作動

詞と比較して心的動詞の成績が顕著に低かった点については、左藤・四日市（2011）とは異なる結果となった。また、誤答の選択傾向をみると、H児では特に心的動詞においてD児よりも包括動詞の選択率が高いことが示され、この結果についても「包括動詞の産出数の中央値は聴覚障害群と健聴群との間で顕著な差はみられなかった」とする左藤ら（2011）の結果と異なっていた。

本研究の結果が左藤ら（2011）と異なった理由としては、本研究で使用した課題において限定動詞が正答となるように文脈を厳密に設定したことや、多肢選択課題を採用したことが挙げられる。左藤ら（2004, 2011）では文脈の限定性が少ない課題文が使用されており、また複数の動詞を産出させる課題を設定している点でも、対象児が既有的動詞を産出しやすかったと考えられる。この点については左藤ら（2011）は、「特定の心的動詞の使用に特定化するほど文脈の制約が厳しくないため、文脈の影響を受けずに多様な動詞が産出されやすい」ことを考察している。本研究と同様に多肢選択法を用いた林田・菱田（2011）において聴覚障害児の成績が低い傾向にあることから、厳密に正答を求めるような課題設定下においては、聴覚障害児の限定動詞の使用は困難になることが推察される。

本研究の結果より、H児の場合、ターゲット動詞の使用が困難な場合、その意味を包括し文脈的に整合する包括動詞を選択することが推察された。すなわち、ターゲット動詞の意味が分からない場合でも、既有的語彙の中から文脈に適した語を選択して意味的に整合性の高い文を導出できるといえよう。一方、D児の場合は、ターゲット動詞の使用が困難な際に、文脈から推測して包括動詞を選択することが少なく、文脈を示す文の意味が読み取れないことや文脈との意味の整合性を考慮せず既有的の語彙を選択していることが考えられる。選択課題の成績がRTと高い相関を示すことから、D児の動詞使用の困難には文法力や語彙力の不足が影響していることが推察される。

4. 2 動詞を用いた文産出における特徴

産出課題の結果、D児とH児のいずれにおいても限定動詞の成績が低く、またいずれの動詞についてもD児の成績がH児より低いことが示された。特にD児については、限定動詞の問題における未回答が多く、H児では未回答の割合が0%であったのに対し、D児では48.3%と高い値を示した。また意味の分かりやすさの評定値が低かった回答を分析した結果、D児では「動詞の意味の誤り」が最も多く、特に「あさる」という動詞を形態的に類似した「あさい」という形容詞の意味として解釈して

いる回答が多く認められた(例:「プールに入るとあさいでした。」)。また「状況説明の不足」も一定数認められ、動詞の意味を的確に理解していないことが示唆された。これらの結果から、D児においては特定の限定動詞が語彙として定着していないことが推察される。産出課題で用いた4つの動詞について、NTTデータベース(2000)によって親密度を調べたところ、包括動詞である「さがす」が5.969、「あつまる」が6.281、限定動詞である「むらがる」が5.844、「あさる」が4.250であり、包括動詞の方が高い値を示した。NTTデータベース(2000)は成人を対象とした調査結果であるため、児童の親密度とは異なることが考えられるが、聴覚障害児においては、日常的に触れる機会が少ない語彙の理解が顕著に困難であることが考えられる(左藤・四日市, 2004)。

5. 結 語

本研究の結果、聴覚障害児においては意味の限定性が強い動詞の使用に困難を示すことが示唆された。この結果は、先行研究と同様であったが、特定の動詞の使用に限定されるような厳密な文脈においては、特にその傾向が強く現れることが示唆された。また産出課題の結果から、限定動詞を用いた文脈の想起が困難であることが示唆され、日常的に使用する機会の少ない動詞が獲得されにくいことが考えられた。

動詞は動作や行動、心的状態を表す語であり、その意味を理解するためには時々の生活経験に応じたことばのインプットや読書などを通じた豊富な文脈の中で意味を読み取る活動が必要になると考えられる。このような活動の中でそれぞれの動詞の意味の違いを理解し、さらに使用に結びつけるためには、動詞の意味に関する詳細な分析と聴覚障害児の状況認知や文脈理解の特徴について検討を深める必要がある。由本(2011)は、動詞の意味を理解する上では、動詞が作る構文や文法的性質に反映される意味要素を抽出した捉え方が重要であると指摘している。動詞の意味の違いを規定する要因を踏まえた実証的研究とともに、そのような要因に対する聴覚障害児の認知について検討することが今後の課題となる。

付 記

本研究は、令和元年度(平成31年度)科学研究費(基盤研究B)(課題番号18H01039)の助成を受けた。

本研究の一部は、日本特殊教育学会第57回大会(2019年度)にて発表した。

文 献

- 天野成昭・近藤公久：NTTデータベースシリーズ「日本語の語彙特性」。三省堂，2000。
- 林田真志：聴覚障害生徒における名詞と動詞の共起対の産出傾向。特別支援教育実践センター紀要，11，45-51，2013。
- 林田真志・菱田千子：聴覚障害児における動詞の使用傾向—意味カテゴリーにもとづく分析をとおして—。特別支援教育実践センター研究紀要，9，15-22，2011。
- 影山太郎：日英対照 動詞の意味と構文。大修館書店，2001。
- Marschark M, Convertino C, McEvoy C, & Masteller A. : Organization and use of the mental lexicon by deaf and hearing individuals. *American Annals of the Deaf*. 149, 51-61, 2004.
- McEvoy C, Marschark M, & Nelson DL. : Comparing the mental lexicons of deaf and hearing individuals. *Journal of Educational Psychology*, 91, 1-9, 1999.
- 森山新(編著)：日本語多義語学習辞典 動詞編。アルク，2012。
- 阪本一郎：新教育基本語彙。学芸図書，1984。
- Sarchet, T., Marschark, M., Borgna, G., Convertino, C., Sapere, P., & Dirmeyer, R. : Vocabulary Knowledge of Deaf and Hearing Postsecondary Students. *Journal of Postsecondary Educational Disabilities*, 27 (2), 161-178, 2014.
- 左藤敦子・四日市章：難聴児における動詞の産出傾向—文脈による意味の限定の観点から—。特殊教育学研究，41，195-203，2004。
- 左藤敦子・相澤宏充・四日市章：聴覚障害児における心的動詞の産出の特徴。障害科学研究，35，109-119，2011。
- 澤隆史・新海晃・相澤宏充・林田真志：聴覚障害児の限定動詞の習得に関する研究—文脈と動詞の意味との関連から—。日本特殊教育学会第57回大会発表論文集(CD-ROM)，13-27，2019。
- 柴田武・山田進・加藤安彦・初山洋介：類語辞典。講談社，2008。
- 由本陽子：レキシコンに潜む文法とダイナミズム。開拓社，2011。